

aaca
2026.05

一般社団法人 日本建築美術工芸協会

no.

104

目次

- ・OPINIONS: 共鳴[10]
芸術の受容における共鳴—チリメン絵の場合— 1-2
日比谷孟俊 (実践女子大学文芸資料研究所 客員研究員)
- ・素材を知る[7] 木
木の立ち話 3-4
渡辺雅夫 (木象画・木工造形作家: 個人会員)
- ・[第35回AACA賞本賞受賞作品] 建築家の立場から
小豆島 The GATE LOUNGEについて 5-7
秋吉浩気 (建築家、VUILD代表: 法人会員)
- ・[第35回AACA賞本賞受賞作品] クライアントの立場から
地面から生えているような建築: 地産地消でつくる 8
柳生敏宏 (小豆島ヘルシーランド株式会社 代表取締役社長)
柳生忠勝 (小豆島ヘルシーランド株式会社 取締役副社長)
- ・2026年aaca新春の集い 9
[総務委員会] 中野恵美子 (委員)
- ・第19回aaca建物視察会2025
—奈良・三重地区— 10-11
[会員交流委員会] 石原智也 (NTTファシリティーズ: 法人会員)
- ・第2回aaca建築美術工芸作品展
～会員の協奏～ 12-13
[展覧会委員会] 齋藤卯乃 (委員長)、山極裕史 (アドバイザー)
- ・aacaフォーラム: 「視る」意味をブラッシュアップする体験
第211回: 虹色キューブ制作ワークショップ
第212回: 都市のダイナミズム 空中回廊体験 14
[フォーラム委員会] 萩尾昌則 (委員長)
- ・七福神巡りの始まり
—情文・七福神巡りと日本文化— 15
[情報文化研究委員会] 高橋圭太郎 (委員長)
- ・パーセントフォーアートを知ろう[4]
「文化芸術基本法」の意味するところ 16-17
[パーセントフォーアート研究委員会] 東條隆郎 (aaca会長、委員)
- ・私が思うaaca的空間 18
◎草月会館—丹下健三とイサム・ノグチの建築
堀越英嗣 (建築家: 個人会員)
◎人の感覚に余白を残す
神芳子 (バスケットリー作家: 個人会員)
- ・協会ニュース 19

憲章

日本建築美術工芸協会は、故芦原義信氏が求めた文化的都市の創造を实践する為に、
建築・美術・工芸に関わるあらゆる分野の人々が集まり、連携し、交流し
文化と芸術性の追及と情報の発信を行い
健康で文化的な空間創造に寄与する。

1. 優れた文化的な都市環境の創造を追求する。
2. 地域の環境と文化を尊重しさらに創造を求める。
3. 芸術文化の重要な担い手として社会の発展に努める。
4. 建築・美術・工芸が一体となった総合的な芸術空間を創るよう努める。
5. 文化的な空間創造のための「1パーセント運動」を提唱する。

芸術の受容における共鳴—チリメン絵の場合—

日比谷孟俊 実践女子大学文芸資料研究所 客員研究員、慶應義塾大学システムデザイン・マネジメント研究所 顧問

共鳴するシステムとしての成果物

システム工学およびシステムマネジメント論においては、工学的要素の強いプラントや航空機のような人工物、さらには芸術活動をもシステムとして扱う。システムとは複数の構成要素からなり、その要素のどれ一つが欠けても成り立つことが不可能なものである。オーケストラの演奏を考えてみよう。作曲家、指揮者、さらに、弦楽器や、管楽器、打楽器などの演奏者がいて、演奏するホール、照明、聴衆があり、チケットを売る機能も必要である。これらのいずれが欠如しても、成果物としてのオーケストラの演奏を楽しめない¹⁾。

情報の発信は、発信者の属する集団における文化(暗黙知)の影響を受け、言語化された情報が発信者のコミュニケーション技術を介して発せられる。オーケストラの場合、演奏者は、情報の発信者である指揮者のタクトによるメッセージを言語として捉え、それを自分の楽器固有の機能に瞬時に翻訳して曲を奏するという、情報発信で応ずる。指揮者はそれを聴いて、演奏者が指揮者の意図を理解したかどうかを判断できる。この一連のコミュニケーションは、指揮者と演奏者との間の情報の共鳴に他ならない。

本稿においては、幕末から明治開化期の短期間に作られた、芸術性の高い工芸品とでも言うべき「チリメン絵」の制作および鑑賞を例に、共鳴をさらに考察してゆこう。

チリメン絵の歴史

チリメン絵とは摺り上がった大判錦絵(浮世絵版画)を、力によって縮めたものである。錦絵の製作には、上位概念を決める企画者、絵師、彫師、用紙である奉書の制作者、その商人、摺師、絵を売る地本問屋(企画者でもある)、そして受容者としての購入者もがステークホルダーとして関与している。すなわち、規模の大きなシステムである。上位から下位へとステークホルダー間で共鳴がおき、企画者の意図や暗黙知が伝えられてゆく。しかし、チリメン絵の制作意図を調べてゆくと、共鳴の経路が通常の錦絵のような単純な一方向ではなく、チリメン絵の製作には、美の受容者が美の創出者としても関わっていることに気づく。

筆者は江戸吉原文化に関する研究の過程で、シワシワに加工された遊女絵に遭遇し、その質感に大いに興味を持った。研究仲間とシンポジウムを企画し、これまで忘れていたチリメン絵に関する本を作ることができた²⁾。

図1の左は安政2年(1855)の江戸大地震直後に刊行された、5枚揃い大判遊女絵の1枚「江戸町二丁目と泉屋内鶴の雄」を縮めたチリメン絵である。図1の右は、その一部の拡大であり、白い線で示す皺(シボ)が見えている。既に板行

された大判の錦絵(縦355mm、横250mm)が、あたかも縮小コピーのように、面積として36%程度(縦213mm、横156mm)に縮められている。果たして、何を目的として、いつ、誰が、どのような方法で、これを実現したのであろうか?

チリメン絵の歴史は、文政10年(1827)における『許多脚色帖(きよたきやくしょくじょう)』に始まる。三代目中村歌右衛門が最頂だった大坂道修町の薬問屋吉野五運が、文人浜松歌国に依頼して上方芝居の番付や縮小した役者絵を、スクラップブック(画帖)に貼り込んだことに始まる³⁾。その後、この技術が時間をかけて江戸に伝わったと想像され、幕末から明治維新の短い期間に、江戸(東京)において美しいチリメン絵が制作された。明治9年(1876)頃になると、安直な図柄の錦絵を圧縮したチリメン絵が大量に作られ、海外に安価で輸出された。これにより、チリメン絵は一括りに玩弄品というレッテルを貼られてしまい、幕末の美しいチリメン絵は忘れられた存在となった。実態はそうではない。幕末のチリメン絵は優れた工芸品である。



図1 吉原の遊女「江戸町二丁目と泉屋鶴の雄」を描くチリメン絵(左)。右は左赤枠の拡大図。白線は等方的に圧縮するための互いに直交する3組の皺の方向を示す

チリメン絵の制作法と美的特徴

元絵としての大判錦絵に力をかけて縮めることにより、紙に摺られた錦絵は布のような柔らかな手触りとなり、色材の密度が増すことにより彩度が増し鮮やかになる。圧縮の工程によって導入される皺(シボ)は作品に質感を与え、皺が光を散乱するので絵が輝いて見える。かつ、絵に当たる照明と鑑賞者との位置関係により、絵の印象が異なるという特徴を有する。

皺は絵を機械的に圧縮した際の痕跡である。圧縮法は次のようである。図2Aに示す茶色の型紙を用意する。型紙は、平行な溝が彫られた木型に和紙(楮紙)を当て、山型の溝をヘラで紙に転写し作られる。柿渋を塗り炎天下での乾燥を100回ほど繰り返すと、降伏応力がバネのように大きくなり、繰り返しの圧縮作業が可能となる。圧縮の工程を図2Aから2Dに示す。

どのような角度で、どのような順番で皺を入れて圧縮して

いるのかを解明できれば、チリメン絵の制作法とその魅力が、一層、明らかになる筈である。生成AIによる画像解析により、紙の辺に対する皺の角度やピッチを瞬時に決めることが可能となった。芸術と科学との共鳴である。

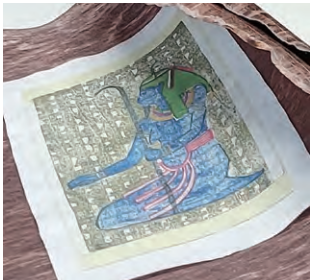


図2A 絵のウラとオモテを型紙でくるむ



図2B 布と共に棒に巻き付ける



図2C 足で踏み転がし、弛みがないように締めつける



図2D 揉み台による圧縮

美の受容者であり発信者でもあった趣味人：陰翳礼讃

チリメン絵は既存の錦絵を縮めたものであるため、残っているものが少ないが、工芸品として美しいものは画帖として残されている場合がある。画帖に加工される前の状態のもの、あるいは画帖をばらしたものが市場に出ている。画帖を調べると、皺のピッチが狭いものや広いもの、紙の辺に平行(直交)する皺が目立つもの、斜めに入った皺が目立つものなど、制作法が一定でないものが入り混じっていることがある。このことから、趣味人たちは気に入った錦絵が何枚か貯まると、職人にチリメン絵に加工させ画帖にし、これを携行して仲間と見せ合い楽しんでいただけた可能性がある。多くのチリメン加工職人がいたが、お互いに技術を秘密にしていた。

慶應3年(1867)のパリ万博に清水卯三郎によってチリメン絵が持ち込まれている。日本に画帖として残るチリメン絵画帖とは、制作の動機が異なる筈である。元絵となる大判錦絵は大量に作られ消費された商品である。一方、チリメン絵や画帖は、趣味人の美意識によって個人的に作られたものである。趣味人同士がチリメン絵画帖を見せあって楽しんでいただけたとするなら、趣味人は美の受容の最終者ではなく、芸術的価値の発信者とし共鳴をさらに続けていたことになる。

平版の通常の錦絵にはない美的要素を齎したのは、チリメン加工による皺の存在である。皺の存在が、照明の角度と観察者の視点との組み合わせを介して、絵の印象を異な

るものになっている。動画でその様子を紹介したいが、叶わない。電気照明が登場する以前の、光源がローソクや行燈であった時代の鑑賞者たちは、揺らぐ光に照らし出されるチリメン絵を、幻想的な雰囲気のもとで楽しんだに違いない。谷崎潤一郎の『陰翳礼讃』の世界である。揺らぐ灯りを利用したチリメン絵の鑑賞は、ハイテク利用の照明により容易に復元が可能であろう。芸術と科学技術との共鳴である。

チリメン絵技術を現代の写真に応用した例を図3に示す。アドリア海に面した石造の教会である。皺の効果により建物の屋根や石の壁に立体感が、さらに遠方の海の波に輝きが与えられている。写真とチリメン絵の共鳴である。



図3 チリメン加工を写真に適用した例。写真撮影 林隆久

参考文献：

- *1 FORSBERG Kevin, MOOZ Hal and COTTERMAN Howard, "Visualizing Project Management - Models and Frameworks for Mastering Complex Systems" Third Edition, John Wiley & Sons, Inc. 2005
- *2 日比谷孟俊、山本親、隠岐由紀子 ほか『書物学』32巻(チリメン絵) 勉誠社 2025年
- *3 赤間亮『書物学』32巻(チリメン絵), pp.10-17, 勉誠社 2025年

謝辞：

チリメン絵の歴史について討議頂いた収集家川上宏氏および、画像の提供を頂いた参宮ブランド「擬筆紙の会」堀木茂会長に謝意を表します。



日比谷孟俊(ひびやたけとし)

1945年生まれ。慶應義塾大学大学院工学研究科修士課程修了。工学博士、博士(文学)。日本電気(株)基礎研究所主席研究員、東京都立科学技術大学(現東京都立大学)工学部教授、慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科教授を歴任。2017年より実践女子大学文芸資料研究所客員研究員。2018年より江戸伝統文化推進燈虹塾代表および塾頭。専門は材料科学、航空宇宙工学、江戸伝統文化。科学技術庁長官賞受賞(1988年)、『磁気光学の最前線』(共著)講談社(1989年)、『マイクログラビティ』(共編)培風館(1994年)、『江戸吉原の経営学』笠間書院(2018年)

素材を知る[7] 木 木の立ち話

渡辺雅夫 木象画・木工造形作家 [個人会員]



出会った木たち

私は芸大卒業後、大手電機メーカーで白物家電分野や無線分野などの製品デザイン業務に携わりました。そして会社での仕事と並行し、ウッドクラフトの制作に取り組み、気がつけば38年という年月が過ぎていました。

地球上の樹木は何万種もあると言われています。分野や作家により扱う木は様々です。私はこれまで20数種類の木を扱ってきました。今回はその中から幾つかの木について、木を使う創作作家の視点で紹介します。

朴——木版画・まな板等で馴染みのある木

入社当時に担当した白物家電分野でのデザインモデルは、ラジオやステレオなどの無線分野とは違い、木型と呼ばれる天然木で制作するのが主流でした。その発注先の各モデルメーカーが精密な加工技術による木工として制作する際、主に使用されていたのが「朴(ほお)」です。朴の木は散孔材*1で、狂いが少なく加工性がよく重宝する木の一つです。やがてモデル制作では木材をパウダー状にして接着剤で固めたMDFと呼ばれる人工材に置き換わっていきました。最近私も飾り物のクラフト制作で使用していますが、産地によっては注意が必要です。

*1 環孔材と散孔材の違いは、木の水分、栄養分を通す導管の配列で生じる木目の差による。環孔材は年輪に沿った部分の導管が太く木目が強く出るが、散孔材は細い導管が均一に出るため木目が弱いという違いがある。

白木材——明るい色調の木の総称

若い頃、デザイン・インテリア専門誌でフィンランドのアルヴァ・アアルトのシンプルな白木材(カバの木的一种バーチ材)によるツールを知り、購入したことがあります。これらの北欧の白木を使った木目や色合いの優しいデザインに触れ、様々な白木に大いに興味を持つようになりました。



《雪色の風景》1992年ハンズ大賞ハンズマインド賞
栃を雪に見立てた作品。その他紫檀、黒檀、カリン、スタンドガラスなどを使用

白木の中でも、仲間のクラフト作家が使っていた「栃(とち)」は、木目が細かく絹目肌と呼ばれるようなキラキラとした美しさを持っていて、私もそれに魅せられ、写真の作品《雪色の風景》を初め、よく使うようになりました。また、虫に食われ自らの樹液で修復した部分は刃がこぼれるほど固くなりますが、独特の黒い模様を生み出し、この模様を味わいの一つとして楽器などに活用されているケースもあります。その他、木の実が飛騨地方などでは郷土菓子のひとつ「栃の餅」としても知られています。同じ樹種でも性質が少し異なりますが、フランスでは「マロニエ」と呼ばれ主に街路樹に利用されるなど国民に愛されている木です。

ウォルナット——チーク、マホガニーとともに世界三大銘木のひとつ

この木は、建築家ジョージ・ナカシマの椅子が紹介されていたインテリア専門誌で知りました。辺材*2部分を使うと民芸的になりがちだと思いましたが、それを肘掛けに使ったシャープでモダンなデザインに衝撃を受けました。この椅子は当時としては大胆な造形だったと思います。私はこの木の少し紫味の掛かった濃い色彩、散孔材らしい上品な木目、加工のし易さなどに魅力を感じよく使っています。

*2 木は外側に向かって成長。樹皮に近い色の薄い外周部は辺材と呼ばれる。一方成長が止まった状態で独自の濃い色素を持つ中心部は心材と呼ばれる。

ウエンジ——比重が1を超える部位もある重量感豊富な木

初期の頃は私は造形を引き締めるための黒い木として黒檀を使っていましたが、最近では「ウエンジ」というアフリカ材を使うことが多くなりました。ヨーロッパでは床材などにも使われているようで、黒檀より木目に癖が少なくモダンなイメージがあり気に入っています。

寄木技法

木工芸の様々な技法の中で、私も取り組んでいるのが寄木。寄木は様々な種類の木を使い、色や木目の組み合わせで図柄や造形の魅力を創作するものです。日本で特に親しまれているのが「箱根寄木細工」。色の違う木をそれぞれ三角柱等に加工、接着して一つの大きな塊を作り、手の平一杯ほどもある幅広のカンナで薄くスライスした材を箱などの表面に貼り合わせて作られています。その他の寄木では象嵌手法によるものが多く、ヨーロッパでも同様に歴史ある工芸品、家具調度品などに用いられています。スペインの「タラセア」「パーケット」などがその代表例です。これらでは主に幾何学的デザインが主流ですが、具象的な例えば花をモチーフにインテリアの飾りと

して美しい絵画的な作品を創作している作家も多くいます。

これらの技法では素材の特性に熟知し、熟成された精巧な加工技術を駆使することが求められます。またデザイン面では色のコントラストを如何に上手く活かすかが大事になります。木は絵具のようにカラーレンジの幅は広くなく、特に鮮やかな配色には限界がありモノトーン的で地味な印象の配色になりがちです。それも悪くはありませんが、栃やブナなどの白木、パドックに代表される赤い木、黒檀やウエンジに代表される黒い木を組合せることでメリハリを付け、さらに木目も活かせば他のアートにも負けない強い印象の作品になるのです。



《寄木の雛飾り》2003年朝日現代クラフト展入選
ウエンジ、桜、神代タモ、栃などを使用

銘木商の現場

日頃お世話になっている京都三条の創作木工芸店「酢屋」。木工芸品だけを扱うこのお店は江戸時代から300年続く坂本龍馬ゆかりの銘木会社が経営しています。10代目社長の中川敦子氏と木材についてお話をさせていただきました。

冒頭、銘木という素材について「内装材である銘木は自然の姿を見せてくれる素材。地面に植えて育て手入れする自然物であり、表情が全て違い1本1本に個性がある」「幾多の風雪に耐えた木は強く、倒れる木は何処かに弱さを持っているということでもある」と話されました。このような木に対する深い造詣は企業の経営理念であり、長年の商いを支えて来たものだと思います。

戦後の銘木事業における新しい屋号「千本銘木商会」には「千種類千本と限りなく多様な素材を扱いたい」という先代9代目の思いがあるとのこと。その商いで難しさについては、「多くの木をすぐ使えるようにするには乾燥・在庫・保管の問題や歩留まりの問題がある。納品先の建築界には節目、皮付きは避け、美しい、整っている均質さを優先する傾向にあり、自然物を一つの意匠として捉える工芸界の価値観とは異なるという点があると思う」とのことでした。

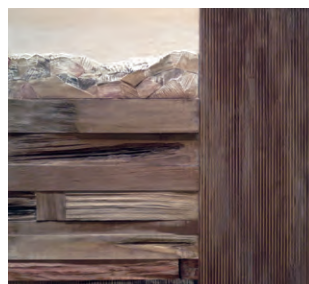
インテリアの洋風化による変化については、例えば框などでは、木目に樺と同様の美しさがあり、より明るい色がモダンな雰囲気合うということで、タモ材の需要が増えているそうです。また有名な北山杉は床柱での需要が激減し、以前は植林～伐採まで30～40年というサイクルが需給バランスにより上手く回っていたとのことですが「このようなサイクルを如何に回せるようにするかについては、単発の開発だけでは回らないだろうと思う」と今後に向けてのお話もされました。



1721(享保6)年創業の銘木会社の老舗。幕末には坂本龍馬と海援隊隊士かくまい、活動拠点を提供した。戦後は都市環境の変化を受け、銘木商としての社屋を三条から千本通りに移転し、気持ちを一新させるため社名を「千本銘木商会」とした。三条龍馬通りの江戸時代からの店舗は「創作木工芸 酢屋」「ギャラリー龍馬」として現在に至る

アートで木による表現の可能性を模索

20年ほど前からはアートにも関心を持ちクラフトとは違う切り口で取組み様々な場で発表しています。美しい木目が出る木材なのに何と勿体ないということになるかもしれませんが、綺麗に仕上げるといよりも木を鉋で割ったり、折ったりなど手法も変え、無垢材だけではなく木を粉末状にしたものや漆喰なども使い表現を広げる試みをしています。鑑賞者から「これらの廃材はどこで拾われるのですか?」という質問を頂いたときはとても楽しくなります。自然な感じを大切にしながら常識的な価値観にとらわれることなく挑戦し続けたいと思います。



《遠い憧憬 雪山》2018年第4回「街に飛び出す作品展」出品。目黒区東山3丁目計画にて推薦、設置。
ウォルナット、ウエンジ、タモ等を使用。鉋で割った目を絵画のタッチのように扱い、漆喰を施して雪山を表現



《端材の街》第8回BOX展(2025年)特別賞
ウォルナット、栓、タモ等を使用。鉋目を残し、漆喰を施し速く震んで見える街を表現

[第35回AACA賞本賞受賞作品] 建築家の立場から 小豆島 The GATE LOUNGEについて

秋吉浩気 建築家、VUILD代表

建築・空間創造への根本的な問い

文化とは何か。かつてある経済誌の取材でそう問われた際、私はこう答えた。文化とはビジネスモデルや技術的流行の対極にあるもの、すなわち人間の存在の拠り所そのものであると。今自分たちがここにいる理由、出自、歴史—それらを束ねたものが文化であり、建築はその文化を空間として結晶させる営みだと考えている。

しかし短期的な利潤を追い求める経済は、こうした長期的な視野を奪ってきた。文化は経済に搾取され、その行く末が今日の環境危機だとすれば、建築もまたその構造から自由ではない。だからこそ私は、建築を「消費される商品」としてではなく、「地域の文化と経済の好循環を生み出す起点」

として捉えなおすことを、自らの建築思想の核に据えてきた。

参照すべき先例がある。イタリアの実業家ブルネロ・クチネリは「人間主義的経営」を掲げ、企業利益を故郷のソロメオ村の文化・環境へと再投資し続けた。よき環境がよき人をつくり、よき人がよき経済をつくる—この「贈与と利益の好循環」こそ、私が理想とする建築と地域の関係性に重なる。建築は竣工して終わりではなく、地域に根ざした時間と物語を積み重ねることで、はじめてその意味を獲得する。

理念を実現させるしくみ

思想だけでは建築は建たない。それを地に足のついた実践に変えるために、私たちVUILDが重視するのが「建築の



民主化」という概念だ。デジタルファブリケーション技術(ShopBot等)を活用することで、専門的な技能を持たない施主や地域の人々が建築プロセスに主体的に参加できる環境を整える。設計者が一方的に決めるのではなく、対話を重ねながら施主が建築に参加できること—これがVUILDを選んでもらう最大の理由であり、私たちが地域に提供したいしくみの根幹である。

もうひとつの鍵は、地域の「余剰」を活かす発想だ。農業には繁忙期と閑散期がある。その閑散期こそが建築参加の余地を生む。半農半築とでも呼ぶべきこのあり方は、地方固有の時間的豊かさを資源に変える。テクノロジーと余剰時間を組み合わせることで、高品質でありながら地域に根ざした

手仕事の建築が実現する。さらに、既存のサプライチェーンをあえて迂回し、島内の木材・石材・土といった地場素材を最大限に活用することで、経済的循環も地域の中で完結させる。これが、私たちの「しくみ」の全体像だ。

具現化としての「小豆島 The GATE LOUNGE」

施主であるオリヴ兄弟は、親子三代にわたって「小豆島の発展に寄与する」というパーパスを掲げてきた。その覚悟を象徴するのが、2011年にスペイン・アンダルシアから移植された樹齢1,000年のオリーブの大樹だ。その千年大樹の隣に、顧客との交流拠点をつくりたいという依頼が、このプロジェクトの始まりだった。



私たちが最初に提案したのは「ゴールではなくスタートをつくる」という発想の転換だった。当初の建設地では、建築と海の一対一関係になりオリーブ畑全体の体験が閉じてしまう。そこで、各拠点を結ぶ「起点=門」としての建築を提案した。訪れた人が門を潜り、千年大樹と劇的に出会い、オリーブ畑と瀬戸内海を巡り、再び建築に戻って安らぐ—そのような動線と体験を一体化させた、ゲート機能とラウンジ機能を兼ね備えた空間が「小豆島 The GATE LOUNGE」である。

構造材は、島中央の財産区から調達したヒノキの丸太を使用した。アントニン・レーモンド由来の「半割と太鼓」の木造技法を援用しつつ、V字に組み込まれたトラスの間から光と風を取り込み、構造と環境を一体化させた。基礎には街中に転がる約1トンの花崗岩を据え、アンカーボルトで緊結するこ

とで風圧・地震に耐える構造を実現。上部から基礎まで、すべて島内の素材で建てることを達成した。外装には地中海の大聖堂にも用いられるチタン亜鉛合金を選択。経年変化で石のような質感を獲得するその素材は、瀬戸内の静謐な海とオリーブの輝く葉の両方と呼応し、地中海と瀬戸内海をつなぐ物語の象徴となっている。

建設プロセスもまた、前述のしくみの実践そのものだった。施主の社員総出による丸太の皮むき・研磨・塗装、ShopBotによる部材加工、ビニールハウスを改造した島内乾燥機の開発、そして1日での上棟—これらすべてに施主チームが主体的に参加した。竣工後、関わった人々が「この建築自分たちがつくった」と誇らしげに語る姿に、「建築の民主化」の手応えを感じた。



[第35回ACA賞本賞受賞作品] クライアントの立場から 地面から生えているような建築:地産地消でつくる

柳生敏宏 小豆島ヘルシーランド株式会社 代表取締役社長(写真左)

柳生忠勝 小豆島ヘルシーランド株式会社 取締役副社長(写真右)



「小豆島 The GATE LOUNGE」があるのは「千年オリーブテラス for your wellness」。この施設を運営する、オリーブ兄弟の愛称で知られる小豆島ヘルシーランド株式会社の柳生敏宏社長と柳生忠勝副社長にお話を伺いました。

VUILDへの設計依頼の経緯

もともと、「自分たちより若い建築家と挑戦的なプロジェクトと一緒に創りたい」という気持ちがありました。そのような中、たまたまご縁があって秋吉君にお会いしたら、人柄がとても魅力的で、VUILDの「まれびとの家」「Nesting」を見せてもらい、秋吉君に頼もうという感じになりました。

自分たちでつくる——建築の民主化

自分たちでラフに思い描いていた建物は四角い箱で、効率重視の無人決済を取り入れることも考えていました。でも、最初に出てきた案は設置場所も建物デザインも全く違うので、機能も、人が行き交い施設全体のハブとなる「ゲートラウンジ」という位置づけでした。

最初に行ったのは、秋吉君とのフィールドワークです。小豆島は石が採れるとか、130ha程ある財産区には檜や杉が植林してあるとか。その上で、土地の木が建築にあまり使われてないのは小豆島に木材の乾燥工程を担うところがない為なので、そこは自分たちでやろう。こんな論文あったからこの通りにやってみよう。樹皮は自分たちで剥こう。そういった感じで進んでいきました。「建築の民主化」の意味するところは、進める中で徐々に理解していき、一緒に歩くからは自分たちで動く必要があると実感するようになりました。

なによりも、新しいチャレンジに興味がありました。もちろん、設計当初はコロナ禍が完全に明けていない頃で、スタッフの手も少し空いていて、そのリソースを使えば外注するよりコストも下がるという思いもありました。とはいえ一歩を踏み出したのは、プラモデルのように建物が作れると聞かされ、案外気軽そうだったからです。秋吉君はいつも楽しそうに言うんです。それが後押しにはなりました。すごく大変ですと言われていたら、絶対にやってなかったと思います。

確かに、各材料に番号がついていて、全部組み立てたら形になるので、プラモデルのようではありました。ただ、パーツが大きいですから労力がかかります。コンピュータ制御の自動切削機(ShopBot)をリースして既存建物内に設置した際にも、粉塵対策の設備を整える必要がありました。部品の切り出しでは、当然失敗もありました。大変な部分もありましたが、やってみると楽しいんです。手を動かす中で、自分たちの建物には自

分たちで作っている感じをもちたいと思うようにもなりました。

施工期間中、VUILDの担当者も遠方より幾度も訪れ、多くの時間を過ごしてくれました。現場で起こったことに対して、大工さんや屋根屋さんなどと意見を出し合っていて、ここが研究開発の現場のようでした。

建築の新たな価値

建物が出来上がって、建築も自社のプロダクトと同様に、どこで誰がどう作ったかがわかる「手触り感」に価値があることに気づきました。チャレンジを通して、設計者、施工者、地元の森林組合、素材の職人、スタッフなど多くの関係者に深く関わることができました。地元の木を使い、地元のネットワークを活用したことで、訪問客にその過程を語れる建物にもなりました。今回の協働のプロセス自体が新たな繋がりを生み出し、完成した建物にストーリーと温かみを与えたように感じています。

また、木材の乾燥工程を島内で行う施設を整備したことは、島の木材サプライチェーンに革新をもたらしたと思っています。コスト面から追随者はまだいないのですが、島内完結の可能性を示した点で大きな一歩となったと思います。

この建物ができる随分前、著書『「風の谷」という希望』で自然と人間が共存する自律的な地方(疎空間)を提案されているLINEヤフーCSOで慶應義塾大学教授の安宅和人さんが来られた時に、「地面から生えているような建築」を作りたいとお話しました。当時は少し感覚的なものでしたが、ちゃんと自然に負けているというか、土地に馴染んでいる感じ。形態だけではなく、その土地の素材の使用や、人が繋がりみんなで物語を紡ぐという面も含めて根ざしているイメージです。それがようやくひとつ完成したのだと思います。

私たちの会社の社是は「心と体と絆の健康を追及して、瀬戸内・小豆島の発展に寄与する」というもので、当然、小豆島でできることは小豆島の中でやりたいということがベースにあります。その真意を、今回の建物づくりを通して秋吉君が改めて気づかせてくれた気がしています。



総務委員会

「新春の集い」が1月30日(金)に開催されました。例年は2月に行われていましたが、今年は1月25日～31日に「第2回aaca建築・美術・工芸作品展～会員の協奏～」が建築会館1Fギャラリーで開催されており、新春の集いに参加される会員の皆様に展示会もご覧頂けるようにと展示会会期中の実施となりました。当日、展示会会場では作品を前にギャラリートークが行われ、出品者による熱意ある自作の紹介がありました。その流れは新春の集いの会場にも伝わり、厳しい寒さの中でしたが熱気ある雰囲気となっていました。

東條隆郎会長による挨拶ではaacaの今後の活動などの紹介がありました。引き続き、昨年8月に実施した夏季交流会に参加されなかった方を含めた新入会員5名の自己紹介が、作品や作品写真の提示、パワーポイント投影により行われましたが、各自の作品制作に対する思いが伝わる内容でした。新入会員の皆さんからコメントをいただきましたので、ここに紹介いたします。

中村茂子さん(皮革造形作家)

人間の記憶とは、正しいデータの積み重ねではない。常に、不確かなものへ変わっていく。捻じれていく。繰り返していく。そして時に輝いている。皮革の特性を生かし、その不確かな断片を表現したいと思いました。



《記憶の断片》

西幸恵さん(現代美術作家)

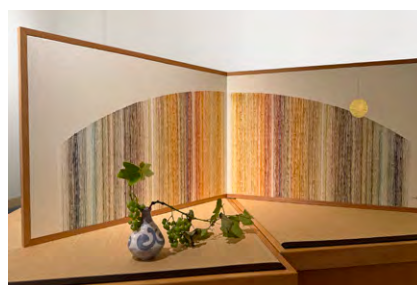
第2回aaca建築・美術・工芸作品展に出品させていただいた作品のタイトルは《Life is …》。人間、社会、他あらゆる事象は複合体であり表面に見えるだけでなく層を成しているというテーマに従い制作したコラージュ作品です。



《Life is …》

稲澤美穂子さん(日本画家)

採取した自然物から作った顔料(160種)で描いた風炉先屏風《100の大地》。私の表現は自然や人の技とのコラボレーションと位置付け、素材から模索しています。強く太い未来でありますようにという思いを込めて。



《100の大地》

渡邊智介さん(大成建設株式会社 設計本部先端デザイン部)

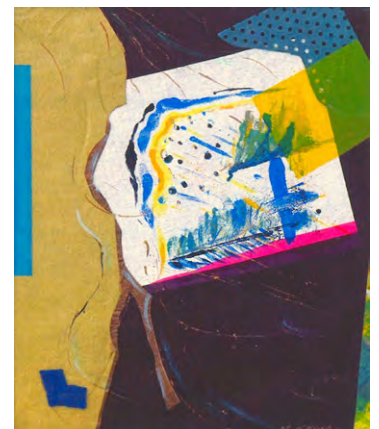
ものづくりや表現が、人の記憶や時間とどのように結びつくのかに関心を持ち、日々仕事に向き合っています。aacaでの出会いや対話を通して、分野を越えた視点から、豊かな空間や価値のあり方を皆さまと考えていければと思います。



荏原 島山美術館(AACA賞2025 美術工芸賞)

大川雅代さん(ミックスメディア)

以前からBOX展等のaacaの展示会を拝見し、皆様の作品の個性豊かな表現にとっても刺激を受けておりました。1978年頃から革工芸制作に関わり始め、現在は革と異素材を組み合わせて質感の違いを生かした表現に取り組んでいます。



《早春》

続いて森暢郎副会長の乾杯の挨拶がありました。ウェルカムドリンクで既に潤っていた参加者たちは、軽いお食事を立食形式で頂きながら自己紹介、意見交換等の歓談を楽しんでいました。会の中程に10ある常置委員会の委員長または副委員長や事務局長から、それぞれの活動内容の紹介がありました。表彰委員会からは、AACA賞の美術工芸賞の位置付けをAACA賞本賞に次ぐ賞としたことなどが発表されました。楽しい時間は米林祐一副会長の中締めでお開きとなりました。今年の参加者は56名。大いに盛り上がり、実りの多い交流の場となりました。

(委員 中野恵美子)

第19回aaca建物視察会2025 —奈良・三重地区

開催日:2025年12月5-6日
場所:奈良県・三重県各所

会員交流委員会

建物視察会2025では、古都奈良と三重県の伊賀地方を巡りました。松隈章ディレクターの「普通の観光旅行では訪れない場所を巡ります。」の発声で始まった視察会でしたが、バスと徒歩で巡る旅は建築そのものだけでなく周辺環境との関係性、特にスケール感の秀逸さに感銘を受けた旅でした。

株式会社三輪山本 本社(設計施工 竹中工務店 狩野忠正)

近鉄奈良駅に10時に集合してバスで向かった一番目が1717(享保2)年創業の素麺店。1983年竣工の現本社は、深い庇の瓦屋根が盛りの紅葉に映えて美しい。フルオープンガラス越しに前庭の紅葉を眺めながら、佐藤可士和さんがパッケージデザインした商品が並ぶエントランスを通過して食堂へ。繊細な感覚で統制された空間に座って創業300年の味を堪能しました。エントランスから出て敷地の奥へ進むと配送用の大型トラックが入庫する倉庫棟。高さもスパンもちがう棟を瓦屋根で連続させて自然につないでいる。倉庫等の圧迫感を感じないどころか大型トラックが入ってくる場所であることにも気が付かない建物とその配置、外構計画のスケールの操りに脱帽。



異なるスケールが出会う中庭

奈良ホテル(辰野金吾)

樹木に囲まれた敷地の中はバスがようやく通れるほど。玄関前に到着すると旋回してキャノピーに半分おさめて停車。日常目にしては都心の道路とバスのスケールが木造建築の玄関先におさ

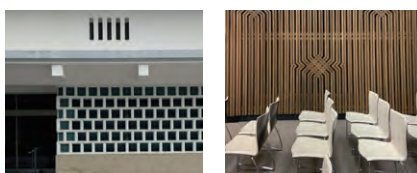
まって時代を超えて異なるスケールが交錯する感覚。車のスケールを包み込んで人と共存するあり方を見た気がした。寺社建築とは異なる木造の醍醐味を感じられる100年建築。歴史の積み重ねは建築のありようを様々なエピソードとともに手慣れたガイドがユーモアとともにたっぷりと紹介してくれて堪能。



木造によるホテルロビーのスケールコントロール

大和文華館(吉田五十八)

開館50年を迎えて2010年に大規模に改修されたが、特徴的ななまこ壁の奥に緑青色が映える外観は美しい。抽象的なファサード構成に俗世間のスケール感から離脱した感覚を味わう。アプローチするときに見上げる高揚感と相まって環境との調和のあり方が独特で、このごろ見失っている感覚を覚えた。駐車場にある文華ホールは奈良ホテルのラウンジの一部が移築されたもの。そこにあることの所以が語られ、地域で保存していくことの大切さと有効性を実感した。



アプローチ 外壁意匠 会議室の壁面

松伯美術館・佐伯邸(村野藤吾)

上村松園・松篁・淳之三代にわたる作品の紹介と日本画の普及、作家の育成を目的とした松伯美術館は、村野建築のなかでもスチールとガラスとタイルが絶妙のバランスで構成され、館内に明るく光が取り入れられて建築と日本画のテイストが調和する環境であった。外部に飛び出たガラスのエントランスや階段室が「こっちへおいで」と招いているようで、中に入ると中央にミュージアムショップのある内部と外の中庭空間が連続する。まるで美術館という空気を建築が軽く包んでいるような感覚である。作品を鑑賞する時間だけでなく館内のどこの場所も立ち止まって時間を過ごすことの心地よさを感じる建築であった。

故近鉄名誉会長 佐伯勇の旧邸は木造建築を学ぶ教科書ともいえ、細部意匠や材料の説明にはどれだけ時間があっても足りず、バスに乗ったときはすっかり日が暮れていた。



中庭とロビーを包む、スチールとガラスの構成

奈良国立博物館 旧館(片山東熊)・西新館(吉村順三)

都心部の東側に広がる広大な奈良公園は道路との間に塀や柵などはなく、鹿が自由に行き来する風景は道路を走る車がはなはだ邪魔に見えるほどに他では味わうことのできない空間と時間の広がりを感じる。奈良県庁から東に歩いて緑地の奥に博物館の旧館が見えたときにはまるで古代の風景をみているような錯覚におちいった。ファサードにレリーフや彫刻がないのは、建設中に発生した濃尾地震によって耐震性を高くす

るために予算をまわしたためと視察会ならではの説明を聞くことができた。仏像館と呼ばれる旧館の天井が高いエントランスに展示された金剛力士立像は、空間ボリュームと相まって圧巻であった。近年の改修で設置された天井のルーバーは、フレンチルネサンス様式の建物構成と仏像のスケール双方と調和するスケールの検討に苦労したことが想像される。

吉村順三設計の西新館は校倉造を模した構成で水平に長く伸びるプロポーションが威圧感を抑えている。ガラス張りの1階は周辺環境と視覚的につながり、中央に設けられたおおらかなスロープでゆったりと館内を巡ると古代の時間感覚にふれた気がする。



していった人も懐かしさを感じるができる環境が整えられ世代を超えて記憶につながる装置となっている。減築によって不足する面積は木造平屋の森館で補われ、生徒が一人ですぐすことできるやわらかくてあたたかい環境がつくられている。生まれたての牛を見学できた敷地内では、同じく野澤事務所設計の環境性能の高い寮が工事中であった。



森館

旧上野市庁舎 SAKAKURA BASE(高野洋平+森田祥子/MARU. Architecture)解体・建て替えか保存かで紆余曲折あった坂倉建築が図書館・ホテルに改修・保存された。スチールとガラスのスケールと

調和するコンクリート打ち放しの部材や壁の表情が丁寧に保存され、優れた近代建築と久しぶりに巡り合えた感慨深さがあった。閉じた空間である議場は学習室として利用され用途として厳しい印象も否定できないが、ここでも完成された近代建築の内部空間を存分に楽しむことができた。工業的でありながらもヒューマンスケールであり人が接する部分の肌理がなじむ印象は現在の工業製品から感じる冷たさとは無縁のものであり、この建物全体が建築感受性装置としてこれからも長く使われることが期待される。

俳聖殿(はいせいでん)(伊東忠太)

2日間の旅の最後は松尾芭蕉の生誕300年を記念して1942年に建てられた俳聖殿。芭蕉の旅姿を表現しているそうだが、伊東忠太らしい奇怪さを感じる。漂泊の歌人である芭蕉の永住の場所という難問への答えだろうか。

(NTTファシリティーズ 石原智也 [法人会員])

*朝日新聞の取材記事「古都に残る近現代の名建築」
<https://www.asahi.com/articles/ASTDK1PP4TDKPOMB00BM.html>



旧館(上)と西新館

愛農学園農業高等学校本校舎・森館(小谷校舎)(野沢正光建築工房)

古都奈良から山を越えた山村風景のなかに全寮制の愛農学園はある。暮らすということはたくさんのいのちと生きていくこと。そのために必要な要素が農業・食・人・聖書であり、一学年25人の少人数で全寮制、持続可能な農業を実践しながら学ぶ場所である。耐震性が低いことから建て替えを考えていたRC3階建ての本校舎を2階建てに減築しながら環境性能の向上と木質材料を使うことで時代に適応させて残した。これまで卒業



旧上野市庁舎外観(上)と図書館



俳聖殿前での集合写真

第2回aaca建築美術工芸作品展～会員の協奏～

開催日:2026年1月25-31日
会場:建築会館1階ギャラリー(東京・港区)

展覧会委員会

第2回となるaaca建築美術工芸作品展では、単なる作品発表の場にとどまることなく、建築領域・地方会員の参画を促し、分野・領域や地域を越えた会員全体の「交流」を具体的に実現することを、三塩達也理事の指導のもと目指しました。さらに、本展期間前後に他委員会の催事も集中開催し、aacaとしての交流を充実することも試みました。

また、「会員の協奏」というテーマを掲げ、それぞれの作品が美しく響きあう空間とするために、プログラムの組み立てから展示空間の設えまで意見を出し合い、会場デザインを創り上げました。



多種多様な委員会活動を視覚化したパネル展示

来場者が最初に目にするギャラリーエントランスに会長挨拶パネルとaacaの10委員会による活動紹介パネルを展示しました。各委員会の特徴や活動内容を来場者に共有し、委員会への参加促進と共にaacaが芸術に係る多様な方々の思考と対話の積み重ねにより協奏された集まりであることを示す事を意図しました。



建築・美術・工芸が響き合う会場風景

会場には、建築・建築写真・彫刻・美術工芸作品など、40点の作品が展示され、交流を期待できる豊かな空間となりました。関東はもとより大阪、和歌山、京都からの会員の方が出展され、作品の素材も、石、シルク、ステンレス、皮、紙、木、漆、更には廃棄物などを用い、様々な

形状で表現された展示となりました。

三菱地所設計からは、食品廃棄物を用いジョイントの組み換えにより形や光の入りが変化する組立て可搬式の「お茶室」が出展されました。また、リサイクル可能な白色段ボールに建築写真を印刷し、立体的に構成した「建築写真タワー」は、日本設計・久米設計・大林組・大成建設による写真出展により、実現されました。心に残る美しい佇まいのポートレート、天井まで光彩が広がる幻想的な空間表現、洗練されたアーティストティックデザインなど、各社の視点が協奏されました。



作品を介して、想いが行き交うギャラリートーク

会期中には、来場者の体験価値を高める取り組みとして、出展者が作品への想いや素材へのこだわり、制作過程などを来場者と対話する「対話型ギャラリートーク」を企画しました。作品を通し交流の機会が限られている会員同士の交流が育まれました。

また、建築・美術・工芸が「協奏」し生み出された実作品の紹介を通じて、「協奏」がもたらす創造性の広がり新たな視座を拓くことを意図した山極裕史氏による講演を、作品が佇む空間にて実施しました。その他、会期中には体験型ワークショップ(14頁参照)、新春の集い(9頁参照)、会期終了翌日には七福神を巡る景観の検証(15頁参照)が開催されました。委員会が協奏し、普段個々に活動する会員へ、見る・知る・交わる・体験が重なり合う場をつくり、新たな可能性の広がりが生まれたことは、集合体であるaacaだからこそだと感じています。

建築美術工芸作品展は、同じ領域ご

とに作品を集約して展示するのではなく、領域を越えた交流から「協働」が生まれ、新たな創造へとつながる“はじまりの場”となることを目指しています。aacaに息づく多様性こそが、創造の原動力です。建築・美術・工芸それぞれの思考や技術、価値観が交差し、響き合うことで、これまでにない表現や空間の可能性が立ち上がることを期待しています。



新たな創造のはじまりの場として

「協働」を実現するためには、分野や領域の違いを「視点の差異」や「新たな気づき」へとつながる豊かな資源として受け止め、対話と実践を積み重ねていく姿勢が不可欠です。このプロセスこそが、個では到達し得なかった創造の地平が拓かれ、未来の文化や空間をより豊かなものへと導く力になると信じています。



協奏された実作品を紹介する山極氏の講演風景

今後も、展示と対話、提案と実践を往還しながら、異なる領域がゆるやかにつながり続ける「機会」として、建築美術工芸作品展を新たな空間文化の起点へと育て提供していきたいと思ひます。さらに、aacaらしい「協働」から生まれる関係性を、30cm立方での空間創造を広く公募する「BOX展」へと展開し、両者を循環させることで、aacaの魅力をより広く発信し、豊かな文化の創造へ繋がるよう尽力したいと思います。

(委員長 齋藤卯乃)

講演「Interface between architecture and art—空間を豊かに—」について

「会員の協奏」として建築・美術・工芸が協働した作品としてAACA賞などを受賞したプロジェクトを中心に説明しました。

丸ビルと丸の内仲通り

丸ビルでは基本計画段階でアーティストの選定に入り、事業者はパーセントフォーアート概念を持ち商用ビルにおいてアートの設置が環境を向上させるだけでなく集客にも貢献すると理解を示していただいていた。



丸ビル5階空中中庭園—ガラス彫刻のアート

アートコミッティの設立を皮切りにアート設置に関する考え方の整理、アーティストの選定方法、制作、設置などが議論され実現に至りました。このプロジェクトで重要だったのは選定されたアーティストと空間について議論し最終的には空間と一体的なアートを目指したことです。制作も国内で行い双方向の議論により各々の空間を創りました。見る側は作品として置かれたアート作品ではないためアートとしての意識は薄いかもしれませんが空間としての厚みは増し、より豊かな環境を提供できたと感じています。

パーセントフォーアートへの理解があったことは昭和30年代の丸の内総合改造計画に遡ります。当時、丸の内は高度成長期で近代化されたビジネス中心の街でした。それに対して、働く人の憩いの空間となるように丸の内全体を

つなぐ丸の内仲通りの歩道に箱根彫刻の森美術館とタッグを組み彫刻を設置し定期的に彫刻を入れ替えました。

この試みは現在も継続し、管理運営体制も両社により、さらに強いものになっています。環境・就業者に対するアートの関与がエリアにアートを取り入れる始まりだと考えています。



丸の内仲通り—連続する沿道アート

丸の内パークビル・三菱一号館

復元した三菱一号館は美術館として活用され、街区は東京駅方向から丸の内仲通りにつながる動線として都市の中庭である一号館広場を設けています。この広場は三菱一号館に因んでイングリッシュガーデンを基に計画し来街者・就業者の憩いの広場となるように計画しました。併せて美術館と一体となるアートの広場も考え方に込められています。

東京駅と丸の内仲通りをつなぐ役割として、丸の内仲通りの延長あるいは分岐としても、丸の内仲通りの彫刻と同じコンセプトにより定期的に彫刻が入れ替わります。



一号館広場—仲通りの延長のアート

大手町パークビル・大手門タワー

お堀側に計画したホトリア広場のアートは皇居東御苑との繋がりを意識した緑豊かな空間で災害時に東御苑の災害時避難場所の補助をする役割もあります。

このプロジェクトでのランドスケープにおけるアートはガラス工芸家でaaca会員の新實広記さんと協働しました。新實さんは10名ほどの候補アーティストの中から選ばれ、コンセプトを議論し協働で方向性を決め作品を提案していただきました。江戸城への物資の搬入経路であった道三掘りや当時のレジャーの一つであった舟を用いた花見や余暇をイメージして舟形をした無垢のガラスの削り出しによる《VESSEL》が提案され、池や桜を当時の風物詩としての記憶として外構の空間を構成しています。



ホトリア広場—無垢のガラスアート

伝えたいこと

建築とアートの融合には様々な進め方がありますが、結果は空間をより豊かにし、人々に対してより良い環境を提供することに異を唱える方はいないでしょう。現在、パーセントフォーアートは法的根拠をメインに半強制的にアートを取り入れる議論が進んでいると思いますが個人使用以外の商用ビル・住宅などの利益確保は当然でテナントの売上や土地の価値の向上も当然です。しかし心地よい空間は集客も入居希望者も集まります。それを実践する考え方、豊かな空間を創る方策としての建築とアートの融合を事業者にも理解していただく必要もあると思います。

作品展は個人の活動発表の場で、その場を協働でつくり、BOX展は異業種間の協働による空間提案と理解しています。このような発信が、さらに心地の良い空間を創ることに寄与できることを願っています。

(アドバイザー 山極裕史)

aacaフォーラム：「見る」意味をブラッシュアップする体験

第211回：虹色キューブ制作ワークショップ

第212回：都市のダイナミズム 空中回廊体験

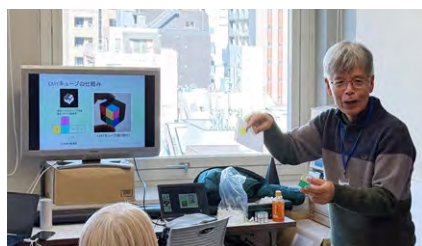
フォーラム委員会

2026年初頭に開催された第211回および第212回aacaフォーラムは、「知覚の再発見」というテーマのもとに連続する体験として実施された。ひとつは手のひらの中の光を扱い、もうひとつは都市スケールの空間を歩く。スケールの差異を超えて、いずれも「見る」という行為そのものを更新する機会となった。

光の装置をつくる体験

1月25日開催の第211回フォーラム「虹色キューブ制作ワークショップ」は、「第2回aaca建築・美術・工芸作品展～会員の協奏～」と同時期にaaca事務局会議室で実施された。同一ワークショップを午前・午後の二回開催としたことで、出品者や来場者が作品展鑑賞の合間に無理なく参加でき、自然と会員同士の交流の機会が広がった。

講師・宮崎桂一氏による「虹色キューブ」は、アクリルキューブの各面にシアン・マゼンタ・イエローのフィルムを貼付することで構成される。シアンとイエローを重ねれば緑が現れ、三色が重なる部分では光が減衰し深い色調へと変化する。



宮崎さんのレクチャー風景



ワークショップの様子

多様なバックグラウンドを持つ参加者が一様に手を動かし、フィルムの配置や重なり方を試行錯誤し、自然光に透かし色の変化を確かめながら、日

常的に接するRGBの加法混色とは異なる「印刷などに活用されるCMYによる減法混色」を体感した。

完成したキューブは各自の試行錯誤の時間を宿す「小さな光の装置」として持ち帰られた。

高速道路を歩く非日常体験

3月9日の第212回フォーラム「都市のダイナミズム 空中回廊体験」は、2025年に廃止された東京高速道路(KK線)を歩行体験するものであり、通常は車両専用である高架道路に立つという非日常の都市体験であった。

当日は新橋口から京橋口まで約2kmを歩行。足元には走行レーンの痕跡が残り、視線を上げれば銀座・有楽町・丸の内・八重洲の建物群が通常とは異なる高さから連続して現れる。地上では賑わいが持続する一方で、KK線上には人影がなく、音も遠く。体感された幅員の広さも特徴的で、都市から一步距離を置いて眺めることで、今まで気づけなかったその輪郭や秩序、気配のようなものが浮かび上がる、いわば「都市の実相が立ち現れる感覚」とも言うべき体験であった。



都市の狭間のKK線

引率者からは、NHK紅白歌合戦における米津玄師のパフォーマンス撮影時の裏話などが紹介され、都市インフラが文化的舞台へと転用される具体像が共有された。また、デフリンピックにおけるマラソン利用の検討では「車両が存在しないこと」が安全性の観点から価値となると「従来とは逆転した評価軸」が示され、参加者に新たな視点を提供した。

第211回 開催日：2026年1月25日 / 講師：宮崎桂一さん / 会場：aaca事務局（東京・三田）
第212回 開催日：2026年3月9日 / 引率者：東京高速道路株式会社 井出恵士さん、鈴木淳さん / 視察地：東京高速道路（KK線）

さらに特筆すべきは、このKK線が公共事業としてではなく、民間主体の枠組みの中で成立し、運営されてきた点である。賃貸収入を基盤とした維持管理という仕組みは、単なるインフラを超えた「開かれた都市資源」としての可能性を内包しており、廃止後に遊歩道として再編される構想も含め、民間主導でありながら公共性を拡張していくダイナミズムが見て取れる。それは、社会に開かれた領域横断を志向するaacaの活動理念とも深く響き合う、都市の変容の一形態と言える。



誰もいないKK線

都市は固定された形態ではなく、機能の更新とともに意味を変え続ける存在である。KK線を歩くという経験は、その変化の只中に身を置き、過去と未来の交差点を実感する、稀有な機会となった。

「当たり前」を問い直す視覚の再発見

このように、小さな光のキューブと都市の上空の大規模インフラという対照的な対象でありながら、両フォーラムはいずれも「当たり前に見えているもの」を問い直す契機となった。視覚とは環境と身体との相互作用の中で生成されるものであり、都市もまた機能や文脈の変化に応じて意味を更新し続ける存在である。

本フォーラムを通じて得られたのは、新たな知識にとどまらず、世界の見え方そのものがわずかに変化する感覚であった。それは、建築・美術・工芸に携わる私たちにとって、最も根源的で持続的な価値を持つ経験であったと言えるだろう。

（委員長 萩尾昌則）

情報文化研究委員会

今回は情報文化、七福神巡りにまつわる話を紹介しましょう。

2008年2月10日、aacaが本部を置く港区内にある赤羽橋界限を皮切りに、情報文化研究委員会(以下、情文)による七福神巡りが始まりました。前年、忘年会の席で「年明けに七福神巡りでもしようか?！」と、誰からともなく言い出し始めた自由で気楽な街歩きイベント。案の定、最初の七福神巡りはお酒の方が先に回り(2カ所目)途中リタイヤしたとか……。情文らしい面白エピソードである。

七福神巡りとは、宝船に乗ってやって来た七柱の外來の神様が日本古來の神社仏閣に祀られるようになり、混在化して、人々がその特別なお利益にあやかるために寺社を巡るという行事である。開運招福、家内安全、商売繁盛などを祈願し、まさに百万の神を持つ日本文化ならではの神仏習合の信仰イベントである。その起源は西方浄土「常世の国」思想とも云われ、「福」は海の彼方から“船”に乗ってやってくる」という神話は飛鳥、聖徳太子の時代からあったようだ。

平安後期から鎌倉・室町へと時代は

巡り、博多や堺の街に代表される南蛮貿易が盛んとなる。思想、宗教、科学、医学、建造等々、この“宝船”がもたらした恩恵は数えきれない。

江戸時代に入り、七福神巡りは、その解りやすさから庶民の間に急速に広まった。

大阪・今宮戎神社では、有名な「商売繁盛じゃ笹もってこい!」の掛け声も賑々しく、鯛と釣り竿を担ぐ恵比寿様を祀る。更には天照大皇大神大国主と他3柱をも一緒に祀られている。

また、古代インドの河川の女神サラスヴァティに由来するのは弁才天。日本では水が湧く場には、それにあやかり祠を掛け、七福神唯一女性の神である“弁才天”が祀られた。多産や財、芸能を司る信仰には欠かせない女神は時代と共に“弁天様”と呼ばれ、仏教の女神から神道の習合を果たしてきた。

七福神信仰とは、多様な形で今日の私たちの生活の中にも少なからず浸透している継承文化だと言えよう。

何でもかんでも楽しんでしまえ!という気風の情文の七福神巡りではあるものの、時代は進んだ。今年初めて“笹

の無いまま”帰路に就く……という、すこし寂しい一面も時代を象徴しているかのようだ。

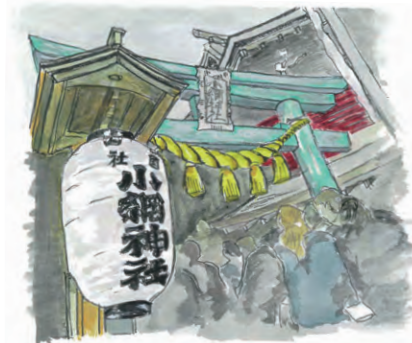
(文・スケッチ:委員長 高橋圭太郎)

これまでの開催

- 2008年…赤羽橋界限
- 2009年…隅田川界限
- 2010年…谷中界限
- 2011年…深川界限
- 2012年…目黒・山の手周辺・清正公園界限
- 2013年…池袋・雑司ヶ谷界限
- 2014年…白金台・池上本願寺界限
- 2015年…新宿・ゴールデン街界限
- 2017年…多摩・青梅界限
- 2018年…葛飾柴又界限
- 2019年…吉祥寺界限
- 2020年…入谷・鶯谷界限
- 2021年…コロナ禍(中止)
- 2022年…コロナ禍(中止)
- 2023年…多摩川河口・羽田界限
- 2024年…原宿・青山・代々木界限
- 2025年…品川宿旧東海道界限
- 2026年…日本橋界限



2026年の日本橋



小網神社



葛屋重三郎

2026年七福神巡り

2025年NHK大河ドラマ「べらぼう」の舞台にもなった日本橋。この界限を歩く七福神巡りは、全国の順路の中で最も移動距離の少ない七福神巡りと云われている。ご年配の参拝者にも人気のコースで、最初に訪れた“小網神社”は東京開運最強神社として知られ、大変な人気を博していた。弁天様が祀られる水天宮は既存建物の趣を残しつつ建て替えられた都市型伝統建築。付近の江戸情緒を探しながらの小旅行が楽しめた。

*地図上の数字が七福神



「文化芸術基本法」の意味するところ

東條隆郎 会長、パーセントフォーアート研究委員会委員

パーセントフォーアート制度について、当協会の前身である日本建築美術工業会は1969年に「公共建物建設にあたって総費用の1%をその芸術的付加物の費用として義務づける法律」の策定について国会へ嘆願書を提出しました。結果的に時期尚早で法制化はかみませんでした。この精神は当協会に受け継がれ、協会の憲章の5において「1パーセント運動」を提唱すると謳われています。

現在、パーセントフォーアート研究委員会では、国に対し、「パーセントフォーアート」制度を推進するよう「提言書」を提出するべく活動を進めているところです。

また、会員の方々に「パーセントフォーアート」の取り組みについて理解していただくことを目的に、会報101号、102号、103号で3回にわたりシリーズ企画「パーセントフォーアートを知ろう」を連載しました。今回は、さらにその理解を深めていただくために、現在日本の文化政策の要となっている「文化芸術基本法」について取り上げます。

「文化芸術基本法」は、2001年議員立法として「文化芸術振興基本法」が制定され、2017年6月に改正・施行されたものです。この議員立法は、「それぞれの政党の基本方針を超えて法律で実現しようとする価値」を複数の政党で共有し、議員間の連携と合意により成立させた法律で、大変意義深いものだと思います。

まず、「文化芸術基本法」の「前文」では、文化芸術の意義と役割が高らかに述べられています。その「前文」の要点は次の通りです。

- ・文化芸術は人間の普遍的な喜びであり、創造性と表現力を育てる。
- ・人々のつながりや相互理解、多様性を尊重する社会をつくる基盤となる。
- ・国や時代を超えた精神的よりどころであり、平和にも寄与する。

・今後も心豊かで活力ある社会に不可欠な役割を果たし続ける。

しかしながら現状は、経済的な豊かさの中にありながら、文化芸術がその役割を果たすことができるような基盤の整備及び環境形成が十分な状態にあるとは言えないとの認識から、第1章(総則)第1条(目的)において、この法律の制定にあたっての大きな目的が3つ示されています。

- (1)文化芸術に関する施策についての基本理念を明らかにすること。
- (2)国および地方公共団体の責務等を明らかにすること。
- (3)文化芸術に関する施策の基本となる事項を定めること。

目的の(1)については、第2条(基本理念)において、1項から10項まで、文化芸術に関する基本的な施策の方向性が示されています。その項目の中で「パーセントフォーアート」との関連で特に重要と思われるものとしては、第2条第3項、および第2条第10項があげられます。

第2条第3項では、文化芸術に関する「地域間格差」「体験格差」のない環境整備を図る重要性が強調されています。「パーセントフォーアート」の推進に当たっての根拠の一つともなりうるものであり、SDGsの精神である「誰一人取り残さない」に通じる考え方であるといえます。条文は次の通りです。

文化芸術に関する施策の推進に当たっては、文化芸術を創造し、享受することに鑑み、国民その年齢、障害の有無、経済的な状況又は居住する地域にかかわらず等しく、文化芸術を鑑賞し、これに参加し、又はこれを創造することができるような環境の整備が図られなければならない。

*「人々の生まれながらの権利であることに鑑み」の根拠としては、憲法第13条(幸福追求権)、第19条(思想・良心の自由)、第21条(表現の自由)、第23条(学問の自由)、第25条(健康で文化的な最低限度の生活を営む権利)が該当していると考えられています。

第2条第10項では、文化芸術により生み出された様々な意義と価値を関連する分野で有機的な連携を図るべきと示されており、この意味するところは、「aacaの憲章1～5」にも通じるものであり、公共の施設建設や街づくり、環境づくりのなかで「パーセントフォーアート」を推進するに当たっての根拠の一つになるものと考えます。条文は次の通りです。

文化芸術に関する施策の推進に当たっては、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが重要であることに鑑み、文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない。

目的の(2)については、第3条(国の責務)、第4条(地方公共団体の責務)に、国及び地方公共団体の文化芸術に関する施策の策定と、実施するうえでの責務が示されています。

これを受けて、第2章(文化芸術推進基本計画等)第7条(文化芸術推進基本計画)に、国は「文化芸術推進基本計画」を定めなければならないこと、第7条の2(地方文化芸術推進基本計画)には、地方公共団体はその地方の実情に即した「文化芸術推進基本計画」を定めるよう努力することが記されています。

文化芸術推進基本計画は第1期(平成30年)、第2期(令和5年)に策定されました。その期間は5年間であり、文化芸術政策の中長期目標4つを定めました。

- (1) 文化芸術の創造・発展・継承と教育・参加機会の提供
- (2) 創造的で活力ある社会の形成
- (3) 心豊かで多様性のある社会の形成
- (4) 持続可能で回復力のある地域における文化コミュニティの形成

これらを実現するために、7つの重点取組と16の政策群と具体的な取組を設定し、国としても必要な情報提供等を実施し、国・地方公共団体等が一体となって文化芸術の振興を図るとしています。

目的の(3)については、第3章(文化芸術に関する基本的施策)第28条(公共の建物等の建築に当たっての配慮等)において、公共の建物等の建築に当たっての国の取り組みの努力規定が示されており、ここに「パーセントフォーアート」の考え方の概念が示されていると言えます。条文は次の通りです。

- 1 国は、公共の建物等の建築に当たっては、その外観等について、周囲の自然的環境、地域の歴史及び文化等との調和を保つよう努めるものとする。
- 2 国は、公共の建物等において、文化芸術に関する作品の展示その他の文化芸術の振興に資する取組を行うよう努めるものとする。

以上のように、文化芸術基本法は画期的な法律であり、国及び地方公共団体が具体的に取り組む目標・施策が示されています。その実現のために、私たちが推進活動を行っている「パーセントフォーアート」制度は、この28条2項の実効性のある施策として推進していくことが最も適切であると考えています。

文化芸術には様々な分野があり、会報102号において、伊藤裕夫氏は、「日本の文化政策の歴史を見るならば、基

本的に文化・芸術振興は『公演芸術』中心に進められてきた。それは公金を使い支援・振興するには文化・芸術の持つ『公共性』という視点が強く意識されていたのではないかと指摘されています。私たちが進めている「パーセントフォーアート」についても、この「公共性」の視点を強く意識することは言うまでもありません。

私たち、建築家・美術家・工芸家・ランドスケープデザイナーなどがかかわる「空間創造」の活動領域は、人々にとってとても身近な「心豊かな社会を形成する」存在であり、「建築・まちづくり・地域づくり」において創造された「空間」は長い年月存在し続けるものであります。「公共性」の観点からも、文化芸術に関する「地域間格差」「体験格差」のない環境創造が求められているとともに、その創造された環境の持つ豊かさや内蔵する多様な可能性・能力は、人々に対し様々な形で大きな影響力をもたらす存在となると思います。

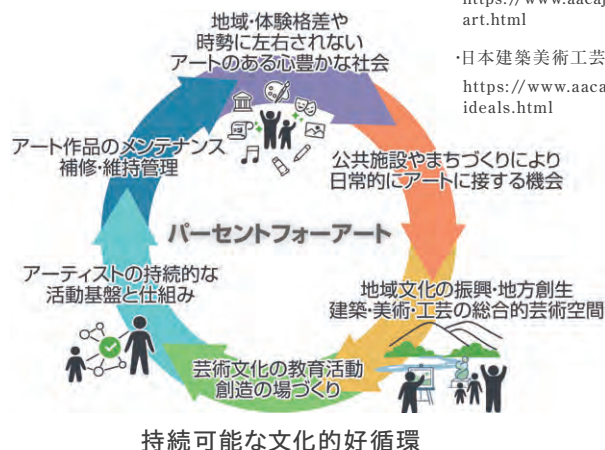
また、「パーセントフォーアート」制度は一過性の施策ではなく法制化することで持続的な施策として進められることが肝要であり、その蓄積がよりいっそう重層化されていくことでさらに多くの価値が生まれていくことが期待されます。年齢、障害の有無、経済的な状況又は居住する地域にかかわらず等しく、人々が

自然に五感を通して体験し感じることに、享受することにより、「前文」に込められた心豊かな社会を形成することに結実していくものと思います。

今回取り上げた「文化芸術基本法」は道路、鉄道、上下水道、電気・通信など人々の社会生活や経済活動の基盤となる欠かす事の出来ないインフラストラクチャーと同様、人々が生きて行く上で不可欠なインフラストラクチャーを構築するものであるとの考えの下、私たちは「パーセントフォーアート」制度をその実効性のある施策として実現することを目指しています。

【参考文献】

- ・小林真理・小島立・土屋正臣・中村美帆『法から学ぶ文化政策』有斐閣
- ・文化芸術基本法(平成13年制定、平成29年改正)(文化庁HPより)
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/kihon/geijutsu_shinko/kihonho_kaisei.html
- ・文化芸術推進基本計画(第2期)(令和5年閣議決定)(文化庁HPより)
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/hoshin/pdf/93856401_01.pdf
- ・日本国憲法(衆議院HPより)
https://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_annai.nsf/html/statics/shiryo/dl-constitution.htm
- ・SDGs(Sustainable Development Goals、持続可能な開発目標)とは(外務省HPより)
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>
- ・パーセントフォーアートを知ろう[1]-[3](aacaHPより)
<https://www.aacajp.com/record/art.html>
- ・日本建築美術工芸協会 憲章
<https://www.aacajp.com/about/ideals.html>



私が思うaaca的空間

草月会館 一丹下健三とイサム・ノグチの建築
と彫刻が融合する「合わせ」の空間—

堀越英嗣 建築家[個人会員]



青山通りを青山一丁目の交差点から車で赤坂方面に少し移動すると、空の景色を映し出す青いハーフミラーガラスの草月会館が見えてくる。ミース・ファン・デル・ローエによる1921年のフリードリッヒ街のオフィスビルコンペ案を彷彿とさせるアイコン的な姿である。これはミース案と同じく立面はどこから見ても矩形だが、鋭角な角を持つ高さの異なる二つの台形平面の組み合わせから生まれる彫刻的效果である。尖がった形態は矩形へと変化する、視点の移動で変化する彫刻の様である。

正面中央入口部分の大開口の半屋外スペースに置かれた、イサム・ノグチによる天井スレスレまで屹立する扱れた黒御影の彫刻に目を奪われると同時に奥へと視線が誘われる。奥にはランダムなトップライトで絞られた光の中に上昇する階段状の彫刻的庭園「天国」が見える。白御影石の床に、日本庭園のように自然石を思わせる彫刻と水が絡み合っている。その階段状の形態は丹下健三による地下の草月ホールの合理的断面形状に呼応している。中2階の青山通りに面したギャ

ラリーと高橋是清翁記念庭園に面したカフェから静謐な「天国」を眺める時、日本庭園を眺める縁側の感覚を思い出す。丹下健三事務所時代に8年間毎日の様にこの空間に接し、時に勅使河原蒼風のオブジェとの融合、三宅一生氏によるファッションショーなどの美の饗宴に出会ってきた。

「天国」はイサム・ノグチが師と仰ぐ夢窓疎石の「苔寺」西芳寺の穢土と浄土の組合せの庭の上段の浄土の石組みへのリスペクトであり、それは老師の「空」であり「虚」でもある。草月流の展示を含め、常に変化するアート展やパフォーマンスが建築と彫刻と合わさり、育むaaca的空間である。



撮影：著者

人の感覚に余白を残す

神芳子 バスケットリー作家[個人会員]



編み組みのテクニックを用い、主に籐、楮(コウゾ)などの自然素材を使って、線で構成した造形表現を「バスケットリーの造形」として発表しています。

建築が構造によって空間を成立させるものであるなら、工芸はその内部に人の感覚を呼び起こす柔らかな層を加えるものだと思います。籐の場合、編みや組みの反復によって形をつくることで、硬質な素材にはない揺らぎを内包します。その揺らぎは光を受けることで陰影となり、見る角度や時間帯によって異なる表情を見せるのです。私が籐という素材に惹かれるのは、その軽やかさ、柔軟性、そして植物由来の繊維が持つ生命の記憶が、空間の中で独特の気配を生み出すからなのです。

作品《守護》では、明確に何かを囲むのではなく、そこに見えない境界や気配で静かに寄り添う存在でありたいと考え、带状の籐が伸び波打ちながら空間に浮かぶようなかたちをとりました。守るという行為(守護)は強く閉ざすこと

ではなく、やわらかく包み込むことと考えました。その感覚を素材の流れに託したのです。

建築空間の中に置かれる工芸作品は、単にそこに存在する造形物ではなく、空間の呼吸や時間の流れに静かに作用する存在であると感じています。aaca的空間とは、建築、美術、工芸が互いに主張しすぎることなく、響き合い、人がそこに立ったときに初めて完成する空間かと思います。素材が持つ静かな力が建築の中に息づき、人の感覚に余白を残すこと、その関係性にこれからも向き合っていきたいと思います。



《守護》

aaca催事予定(2026年6月～10月)

* 詳細は aaca 公式ホームページ参照

AACA賞受賞者紹介のつどい

会場:サンゲツ日比谷 PARCs+ オンライン

第1回:6月3日[水]17:00-19:30

紹介作品:会津柳津駅舎情報発信交流施設、大阪避雷針工業神戸営業所、Lens Park、TODA BUILDING

第2回:7月7日[火]17:00-19:30

紹介作品:小豆島 The GATE LOUNGE、荏原 崑山美術館、小田垣商店、警固竹友寮

第9回BOX展～co-creation～

6月8日[月]-14日[日]

会場:建築会館ギャラリー

8日11:00 オープニングレセプション、
13日13:00 ギャラリートーク/
16:00 交流会、14日15:00 授賞式

2026 (R8) 年度定時総会

6月10日[水]14:00-

会場:建築会館大ホール

*13:00から同会場にて、山本一太群馬県知事による講演会(群馬パーセントフォーアートに関して)を開催します

第213回aacaフォーラム:小田原散策

7月31日[金]14:00-

*出品者と観る小田原アートセッション2026、館長に学ぶ小田原三の丸ホールなど

2026年aaca夏季交流会

8月24日[月]18:00-

会場:田町アリスアクアガーデン

第20回aaca建物視察会2026

10月30日[金]-31日[土]

*南三陸町、陸前高田市、盛岡市など

委員会だより

[表彰委員会]

AACA賞2026(第36回)

AACA賞は、建築・美術・工芸・ランドスケープなど様々な分野が融合し、美しく豊かな文化的景観を創出した作品を表彰する協会賞です。

今回から授与する賞の評価を見直しました。基本的な考え方を踏襲しつつ、建築とともに、それを取り巻く様々な創作の分野から参加する人にも光を当てる賞となりました。

◎選考委員

委員長 古谷誠章(建築家)

副委員長 可児才介(建築家)

委員

金箱温春(構造家)、近田玲子(照明デザイナー)、藤江和子(インテリアプランナー)、降旗千賀子(フリーランスキュレーター)、堀越英嗣(建築家)、松井龍哉(ロボットデザイナー)、宮城俊作(ランドスケープアーキテクト)、米林雄一(建築家)、和出知明(建築家)

◎募集期間

2026年7月1日[火]-9月3日[木]

◎第一次審査、現地審査

第一次審査にて公募作品の中から現地審査対象の入選作品を選考。

その後、選考委員が分担して作品を訪れ現地審査。

◎公開審査会:11月9日[月]

会場:建築会館大ホール

対象作品の作者によるプレゼンテーション後、投票・意見交換を経て、受賞作品を決定。

◎表彰式:12月9日[水]

会場:建築会館大ホール

「協会設立記念総会」にて表彰。

応募要項:

<https://www.aacajp.com/award/competition.html>

aaca | 2026.05 | no.104

発行日:

2026年5月27日

発行:

一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014

東京都港区芝5-26-20 建築会館6F

TEL 03-3457-7998

FAX 03-3457-1598

URL <http://www.aacajp.com>

E-Mail info@aacajp.com

編集:

広報委員会

委員長・編集長 勝山里美

副委員長 齋藤潮美

委員 金原京子 竹生田正 津下庄一

中村弘子 森田高年 山崎和子

山本茂義

8ページ記事執筆:勝山里美

表紙・フォーマットデザイン:矢萩喜從郎

表紙に向き合うと

南ドイツにある、168メートルの世界一高い、ゴシック建築と言われるウルム大聖堂(1377-1890年に完成)は、約500年以上費やして完成に漕ぎ着けることができた。そこには、地上140メートルまで登れる768段の螺旋階段があって、その中心にある柱が植物の蔦を感じさせる造形は必見。わたしがウルムに行ったのは……。最終的に建築へ向かうという理念のもとに総合芸術を標榜し創設されたパウハウスが、1919年、ワイマール(国立)、1926年、デッサウ(公立)、1932年、ベルリン(私立)と、転々と場所を移し存続したが、最後にはナチス・ドイツに閉鎖させられてしまい、戦後、そのパウハウスの流れにあって創設されたウルム造形大学に関心があったからである。マックス・ビルが校舎を設計し、1955年に初代学長に就いて始まったが、パウハウスモデル継続を願うビルと、より科学的で理論思考を重視する他の若い講師陣達との確執があって、ビルは学長を辞し、翌1957年には退官している。約25年前、15年ばかりで廃校となったウルム造形大学見たさに、そこに向かった際、街中で、大学名は通用しなかった。仕方なく、分の勘を頼りに、車を走らせていると、なだらかな丘陵に、写真で見ていた校舎が現れてきて、どれ程安堵したことか。わたしが訪ねた時、ウルム大学医学部が借りていた(1972年から、2010年迄の38年間)ことで、ウルム造形大学があった事実さえ知らない人が多かったことも、その為だったと知ったのだった。

(矢萩喜從郎)



最高の意匠を創造する塗装システム

G-PFシステム® 特殊描画

長年打ち出しコンクリートの色合わせ補修で培ってきた模様描画技術を応用し、塗装の可能性を広げます。最高の意匠性を創造していく新しい塗装システムになります。



<https://www.pialex.co.jp/>



光触媒フッ素樹脂コーティング材「ピュアコート®」開発・製造・施工・販売

株式会社ピアレックス・テクノロジーズ

本社 〒595-0016 大阪府泉大津市桑南町4-14
 研究センター Tel:0725-22-5361 / Fax:0725-22-5363
 東京営業所 〒111-0042 東京都台東区寿3-14-11 蔵前チヨダビル7階
 Tel:03-5830-0055 / Fax:03-5830-0056
 中部営業所 〒510-8114 三重県三重郡川越町亀崎新田77-568
 Tel:059-363-5151



春日部市新本庁舎

撮影:川澄・小林研二写真事務所



久米設計

〒135-8567 東京都江東区潮見2-1-22 TEL03-5632-7811
 東京 札幌 東北 横浜 中部 大阪 九州 沖縄 上海 ホーチミン

**KUME
SEKKEI**



 三菱地所設計
Mitsubishi Jisho Design

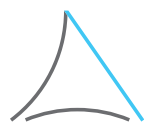
www.mjd.co.jp



建築に、
温度を。

Architectural Design
with Passion

梓設計本社 HANEDA SKY CAMPUS



AZUSA SEKKEI

<https://www.azusasekkei.co.jp>

